Wilding Brands、Denver Canworksの醸造所を閉鎖

Denver Beer Co.、Great Divide、Upslopeの生産は、社名未公表の受託醸造会社に移管される

2026年11月8日（日）



BeerAlienの報道によると、Wilding BrandsはDenver Canworksの醸造所を閉鎖し、Denver Beer Co.、Great Divide、Upslopeの生産を外部の受託醸造会社に移管する。

この移管により、同社はデンバーの自社製造拠点でこれらのビールを生産しなくなる。BeerAlienによると、各ブランドは継続するが、Wilding Brandsは製造を引き継ぐ醸造所を明らかにしていない。

今回の動きは、コロラド州でよく知られる複数のクラフトビールブランドを傘下に持つ同社にとって、大きな事業運営上の転換となる。Wilding Brandsは自社施設で醸造・包装する代わりに、別の

生産者に委託して製品を製造する。この方式では、ブランドの所有者は自社ブランドでビールの販売を続けながら、製造を別の醸造所に任せることができる。

報道では、移管される生産量や外部委託による醸造の開始時期、デンバーの施設に関わる従業員への影響については触れていない。また、決定の理由も明らかにされていない。こうした情報がないため、同社が受託生産を一時的な措置と見ているのか、長期的な戦略転換と位置付けているのかは、現時点では分からない。

それでも、今回の決定はビール業界全体の動向の中で目を引く。醸造所の運営には、設備、人件費、光熱費、包装、不動産に多額の支出が必要となる。クラフトビールのグループ企業にとって、生産を外部委託すれば、こうした固定費を抑えられるほか、費用に見合うだけの生産量を確保して工場を稼働させ続けるという負担も軽減できる。また、需要の傾向が変化した場合や、自社施設が販売地域に合わなくなった場合でも、定着したブランドの市場での販売を続けやすくなる。

そのため、この閉鎖は一社にとどまらない意味を持つ。米国の飲料業界、とりわけクラフトビール業界では、製造工程のすべてを自社で担う必要があるのか、見直す生産者が出ている。複数の知名度あるブランドを持つ企業グループが受託醸造に切り替えることは、利益率を守り、ブランドを存続させようとする他の醸造会社も検討し得る事業再編の形を示している。

供給が途切れなければ、卸売業者や小売業者への当面の影響は限られる可能性がある。より大きな課題となりそうなのは、一貫性の維持と移行の実行だ。生産を別の醸造所に移す際には、レシピ、品質管理、包装基準、出荷時期を維持しなければならない。これらが保たれれば、消費者が変化に気付くことはほとんどないかもしれない。そうでなければ、ブランドの印象や店頭での販売実績に影響する可能性がある。

今回の動きは、クラフトビール市場の一部に重くのしかかっている圧力も反映している。多くの醸造会社が、成長の鈍化、タップの設置枠や店頭スペースをめぐる競争の激化、コストへの根強い敏感さに直面している。そうした環境下では、醸造所を閉鎖しながら受託先を通じてブランドの販売を続けることは、市場から撤退せずに製造上のリスクを抑える方法となり得る。

Denver Beer Co.、Great Divide、Upslopeはいずれも広く認知された定着ブランドであるため、今回の決定はコロラド州のビール業界で一段と注目を集める。外部の醸造所を通じてこれらのブランドの販売を続けることは、Wilding Brandsが自社製造拠点の運営コストからは手を引きつつ、ブランドの価値を維持しようとしていることを示唆する。今後は、委託先にどの醸造所が選ばれるか、移行がどのように進められるか、新たな体制の下で供給と品質を維持できるかが大きな鍵となる。